

特定秘密保護法案

「官邸のアイヒマン」と呼ばれる男

スクープレポート

警察庁幹部が明かす。「北村さんの能力は高いですよ。彼が外事課長だった04年に、北朝鮮が横田めぐみさんの遺骨だとして持ってきたものに白黒をつけようと徹底的に究明した。」結果「あれはクロ(偽物)だ」と2週間あまりのうちに調べあげたわけです。

仕事の仕方は昔からスマート。与えられた仕事を着実にこなし、決して威張らない。単刀直入かつイヤらしくなく、ダメなものには「メ」と、はっきり言えるのはそれだけで才能ですよ」さらに、アイヒマンたる三つ目の理由として、自らの行動にストイックな点が挙げられるだろう。「忙しい生活なのに、早朝、警視庁の道場で剣道の稽古をしていました。『こじしか、自分の時間が取れないんだ』と言っていたようですが、唯一とっていい自由時間を、自己研鑽に充てるほどストイックな人です。ただし、意外と運動音痴らしいですけどね(笑)。見た目こそ、近寄りがたい印象がありますが、厳し

いことを言いつつも、若手にも「元気でやっていると声をかけてくれるところもあります。言葉は悪いけれど、人たらしのようなところがあるので、官僚の信奉者は多いと思いますよ。彼の2代前に内閣情報官を務めた三谷(秀史)さんは、人間的には悪くなかつ

「警察国家」をしるる

実際、官邸の信頼は絶大、とりわけ菅義偉官房長官から評価されており、定期報告のとき以外にも、頻繁に呼ばれているという。

「安倍さんからの信任もきわめて厚いからこそ、民主党から政権を奪ったときに、ふつうなら一緒に首をすげ替えるところを、続投させたんです。内閣情報官としては、安倍さんのもとを直接訪れる回数はかなり多い。週に2〜3回は入っていますよ」(官邸関係者) そんな北村氏が、安倍首相に抵抗してまで、第三者機関を骨抜きにして、秘密保護法案を成立させようという目論んだのはなぜか。

たけれど、口が悪かったので、敵をつくり、メディアから色々と言われました。対して、北村さんはトゲのある言い方をしないから、敵をつくらない。冷静沈着なので、メディアでも、それほど取り上げられてこなかったでしょう」(前出・警察庁キャリア)

同法は男女関係から酒癖まで、公安警察から合法的に調べられてしまう可能性を含み持つている。

テロ対策という名目がつけば、自動車ナンバーを読み取る「Nシステム」などの、警察内部に入ってくる、あらゆる情報が秘匿されてしまう可能性もある。要するに、官邸が主導して成立した今回の特定秘密保護法は、公安警察の権力の肥大化を許してしまう法律なのである。

臨する「妖怪」の狙いはそこにある。北海道警の裏金を告発したとき、公安警察と思わしき人物に尾行されたという、元北海道警幹部の原田宏二氏が語る。「メディアでは、問題のある法律だと喧伝されていますが、秘密保護法と警察とはどのような関わりがあるのかについては、あまり論じられていないんじゃないでしょうか。国会議員の議論でも、わざと避けられていと思うくらいでした。この法律は、公安警察の権限強化法だと私は考えています。過激派も労働組合も衰退している現在では、取り締まる対象者が減り続け、公安警察は仕事がなくなっているわけです。テロ対策の名目というのは、警察官僚にとって失地回復の最大のチャンスで、一挙に営業拡大できるんですよ。私から言わせれば、すでに国民の監視強化はどんどん進んでいます。建て前では防犯目的の監視カメラも、実際は国民を監視するシステムです。

日本は「警察国家」に着々と向かっており、すでにヒト・モノ・カネで警察庁が都道府県警察を完全に支配している実態もあります。ジャーナリストの鎌田慧氏は、警察権力の増大によって、内部告発が行われなくなることを危惧する。「これまでは、内部告発が引き金になって原発から放射能が漏れているなどの問題が明らかになってきましたが、これが一切、シャットアウトされる危険性があります。この法案のもとでは、内部告発者を暴くために警察が捜査に乗り出すことを恐れて、告発する人がいなくなり、また一方で、その犯人探しの捜査には、大量の警察力が必要になるという名目で、必然的に「警察国家」に向かうわけです」組織の権益拡大のため、黒子として法の成立に携った官邸のアイヒマン。国民を守るためにつくられるはずの法律が、官僚や国家権力を守るために機能することを、このまま許していいはずがない。